

## 小野田譲二

### 『革命的左翼という擬制』

(一〇〇一年六月 白鶴社)

#### 3 明大学費闘争に始まる倒錯

一九六六年暮から無期限ストライキに入った明大の学費闘争は、六七年一月二八日の駿河台講堂における団交をもって最初のクライマックスを迎える。一月二八日の直前、秋山と吉羽から、明大ブンド（一部自治会の執行部）が学校当局と妥協を図っていると報告され、全学連と中核派が何らかの対処をすることを決定した。

#### 1

一月二八日の朝、明大の学費闘争の雰囲気をつかむために、ぼくは単独で団交会場である駿河台講堂に赴いた。講堂の入口から長蛇の列は中庭をギッシリ埋めた学生へとつながっている。二千人が限度だと思われる講堂に到底入りようがない。学生の様子をうかがいながら講堂の入口へ引き返すと、あつと驚くべき、長蛇の列の横を、学生服を着た屈強の男たちが整然と講堂の階段を登つて行くではないか。学生服男の横を通り抜け講堂の内部を見渡すと、すでに三百人ほどの屈強の男たちが前列を占めていた。壇上でいよいよ繰り広げられる学校当局と自治会（齊藤克彦全学連委員長がいた）との団交をオレたちが守つてあげるのだと言わんばかりに。

ただちに外に飛び出たぼくは、ベンチに乗り、長蛇の列の学生にアジ演説を始めた。「君らの横を講堂に向かっていく学生を不思議に思わないか。ぼくは今、講堂の中を見てきた。寒風にさらしながら待っている君らを尻目に会場は彼らによつて占拠されている——学生はぼくの周りを取り巻きはじめた。これが何とも不覚だったが、学生服男の一人が「やけに老けてるな」と口にし、「しまった」とひるんだけばくすにささず「学生証を見せる」と詰め寄り、ぼくの完敗で終わった。明大学生の雰囲気を察知する三十分ほどの過程で明大生の気分に成り切つていたぼくは、年齢のことをすっかり忘れていた（三十八歳だった）。そのためか、長蛇の列の学生数十人ほどをまず固め、しきる後、体育会の学生を挑発し、騒ぎをつくる作戦を怠つた。瞬間の戦術ほどあらゆる条件の吟味が必要とされながら、瞬間の戦術ほど条件の吟味にミスを犯しやすいものはないことを痛く味わつた。

校外に追い出されたぼくは、団交も終わつてしまふと午後一時頃、校内に戻つた。秋山と吉羽、それと高橋孝吉や北村行夫など、全学連（都連）書記局が何をしているのか、他大学から動員した活動家にどのような指導を行つたのか、不安を覚えたからだ。ぼくにはまったく信じられないのだが、一人一人が明大の学生の中に潜り込み、皮膚感覚をときめまし、自分の感覺で状況を察知することを何一つ行つていない。運動のセンスは教えられるものではなく、自ら磨くしかない。せつかくのチャンスに巡り合いながら、それを逃して平氣でいられるとは。

#### 2

この日（一月二八日）の夜、ぼく、秋山、吉羽、谷の四人で明大闘争への対処を討論しているところに、清水丈夫が顔を出し「何しているんだ。全力投球しろ」と語つた。ぼくは、「これですべてがぶち壊しになるな」と思いながらも沈黙し、うつむいた。

次の焦点は、二月二日に行われる二度目の団交である。一月二九日から学対部長の任務を放棄したぼくは、明大の中核派系活動家とともに明大和泉校舎（教養部）に入り込んだ。クラス討論で発言することはできないが、クラスの雰囲気をつかむことはできる。その呼吸こそが、学生運動に入りたての一年生と二年生の活動家へのアドバイスの素材になるのだから。

一月二日、和泉校舎のグランドに備えつけられた特設会場で二度目の団交が行われ、グランドには二万人を超える学生が集まつた。三メートルほど高い特設会場に学校当局と自治会の代表が並び、その真下にはおそらく千人は下らない体育会の学生が整然と配置されている。和泉の中核派系活動家は、クラスをまとめるために散つている。ぼくは学生の様子を見ながら群れの中を動いていたが、慶應大学の学生を中心とする中核派活動家十人ほどに出会つた（その中に六五年の慶應学費闘争を闘つた伊川がいた）。彼らにこの間の出来事を簡単に説明し、これから戦術を指示した「ぼくが犠牲になるから、後にうまく統け」と。

手打ち式の団交は整然と続けられ、学生の不満が高まつていく。あちこちにたむろしている体育会の学生が、不満を表わす学生を次々と威嚇し始め、たじろいだ学生によつて群れの隨所に混乱が生まれた。一人一人が分断されているから、たかだか数人の体育会学生の威嚇に怖れるが、数十人の隊列が形成されれば駆散らすことができる。総勢からすれば二万対二千、うねりにもつていくことは必ずしも不可能ではない。ぼくの出番だ。たじろぐ学生を一塊にまとめ、体育会の学生と対峙した。ここまでは予定の行動だつたが、なぜか伊川がとちくるつた。運動の利益を考えずに、体育会の学生に殴られかつたぼくをかばうバカを演じた。体育会の学生のパンチがぼくの眉間に血で染めれば、ひるむのはいずれか。体育会の学生に計画された防衛手段は威嚇で駆散らすことであつて、流血（暴力）ではない。学生の不満を結集させず平穡無事に手打ち式を終わらせることが防衛部隊の役割なので、流血（暴力）は禁じ手だ。だからこそ、あらかじめ説明して狙つた戦術だつたのだが、空中分解で終わつた。

#### 3

大学当局と自治会と体育会が三位一体になつた手打ち式は平穡裡に終わり、明大の学内は体育会に支配された。昼過ぎだと思うが、東大駒場に集まることを口コミで知らされた。ぼくが東大駒場に着いたとき、千人を超える明大生が集まり、それぞれが自分の会議に散つて行った。午後四時から開かれた和泉の活動家会議には七、八十人ほど集まつたが（中核系の活動家も五、六人参加した）、そこにはブンド系の若い活動家が出席していた。確かに解放派系の活動家だつたと記憶するが、ブンド批判を始めた。若いブンド系の活動家は頭を

垂れ「すみません」と謝りはじめる。ぼくはたまにかね、発言の許可を願い、「明日から、どのよう活動するかを討論するために集まってきたはずだ。彼もまた、そのために出席している。そんなつまらない批判で時間を潰すべきではないと思う。そのことだけ言いたい」と討論の軌道修正を行った。討論の様子を見定めたところで退席し、明大闘争の支援にかけつけた百人余りの規模の全部活動者会議に途中から顔をのぞかせた。中核派系が七十人、解放派系が三十人程度だったと記憶する。

北村行夫都学連委員長（早大、六四年入学、解放派）が最後を締めくくった。ごく一般的な明大闘争の話をした後、「齊藤全連委員長の裏切りを利用し、全学連防衛の旗を掲げ、秋山全学連委員長の実現を狙おうとする党派が存在する。われわれ全学連の運動はそのようなものだろうか」と語りだすや、中核派系の活動家はうなだれ、その言葉はすいこまれていった。会議が終わつたのは八時頃だと思ふが、部屋から出たところで早大の水谷保孝（早大、六四年入学、中核派）につかまつた。「ゲオさん（ぼくはゲオさんと呼ばれていた）、中核派の会議に出て下さいよ。ゲオさんが居ないとダメです。動員された中核派の活動家はみんな消耗してますよ」と訴える水谷の言葉を足蹴にして、ぼくは明大の活動家の下宿に向かつた。

それから一日後の二月四日、法政の経済学部自治会室に亡命している明大二部自治会の会議に、ぼくは顔を出した。およそ三十人ほどの学生の会議だが、清水丈夫、本多さん、ぼく、秋山、吉羽、谷の六人が傍聴を許された。なかでも、二部自治会の委員長坂田とコントクトをとつてていた清水丈

夫は発言の自由を得ていた（本多さんは自治会室の外にいたかもしれない）。こうして、清水丈夫が発言した。齊藤一派の裏切りを断罪し、「全学連を防衛しなければならない」と。清水丈夫の発言の最中に「あの人だれなの」「何言つてての」など怪訝な声があちこちから漏れた。あきれ顔を抑えつつ委員長の坂田が「全員、退席してください」と促し、六人は自治会室の外に出た。

一月二九日以来、学対部長の任務を放棄し明大和泉の中核派の活動家とともに行動していたぼくが、清水丈夫、秋山、吉羽、谷と正面から向き合るのは一週間ぶりのことだ。その上、本多さんまでいる。

清水丈夫に向かつて、ぼくは「今の発言は何だ。ぶつ壊しではないか」とぶつけた。起死回生の試みである。本多さんが「小野田の言いたいことは何だ」と、沈黙する清水丈夫とぼくの間に割つて入つた。ぼくは「明大の活動家にとって全学連云々など関係ないじやないです。なぜ、明大の闘争をこれからどう組織したらいいのか話をしないんですか。あんな発言をして活動家から馬鹿にされるだけいませんか」。秋山、吉羽、谷の三人は、終始、下をうつむき無言のままでいた。見切りをつけたぼくは明大の活動家の下宿へと向かつた。

そもそも、本多さんが明大二部自治会の会議に顔を出すのが奇異である。何のために顔を出したのか。明大二部自治会の活動家を中核派に組織する絶好の条件だと判断し、本多さんは見届けたかったのか。だとすれば、その結果がすべてを失う清水丈夫の発言である。いったい、本多さんは何を考えていたのだろうか。

一月二八日の夜、ぼく、秋山、吉羽、谷の四人で明大闘争への対処を討論しているところに、清水丈夫はオレの出番だと、秋山、吉羽、谷の三人を組織した。この事態が本多さんの目にどう映つたか。

ブンドを追いつめ、秋山全学連委員長を実現する絶好のチャンス、そのため全国の中核派活動家を集めて圧力をかける、このような路線をとれるのは清水丈夫しかいない。これこそ清水丈夫の優れた政治的才覚だ。小野田に任せたらチャンスをみすみす逃がしてしまう、ここは清水丈夫に任せるに限る。本多さんが考えた主調音である。その上、明大二部自治会活動家を中核派に組織する絶好の条件を清水丈夫はつくったではないか。本多さんのお墨付きを得た清水丈夫も自信満々であった。清水丈夫の手腕をこの目で見届けようとした本多さんの気持ち、ぼくにはよく分かる。

無知ほど恐ろしいものはない、とはこのことだろう。このときすでに、秋山全学連委員長の実現を代償に、中核派は内部崩壊の危機を迎えていた。そのことに気づかなかつたのは、本多さんと清水丈夫の二人だけである。

二月七日だったか。二月一九日に全学連中央委員会を開き、秋山勝行全学連委員長、高橋孝吉全学連書記長の体制とすることが、全学連書記局会議で決まった。本多さんがお墨付きを与えた清水丈夫の路線の実現である。

秋山、吉羽の脳裏には、二月二日の全都活動者会議で解放派の北村行夫都学連委員長にあしらわれた屈辱が焼きついている。さらにまた、二月四日、明大二部自治会の会議での清水丈夫の醜態を目撃している。このまま二月一九日の全学連中央委員会を迎えたらどうなるのか危機感がつのつた。

こうして、秋山と吉羽の二人がぼくのところにやつてきた。「清水丈夫の路線ではやつていけない。ゲオさん恨つてくれ」と。吉羽がぼくにつけ加えた。清水丈夫が「ゲオさんいなー。シメシメ」と言いながら、秋山と吉羽に方針を示してきたことを。

二月八日と二月一日の二度にわたって、ぼく、秋山、吉羽の三人が本多さん、清水丈夫と対峙し、この間の清水丈夫の路線【秋山全学連委員長実現のために中核派の活動家を動員する】を批判し、二人に納得させた。

清水丈夫は学生運動の指導から退き、ぼくは学対部長の仕事に復帰し、二月一九日の全学連中央委員会を迎える。時すでに遅い。全学連中央委員会の主導権は解放派が握り、中央委員会の後に開かれた中核派の活動者会議では、水谷、加納（東大、六五年入学）を中心にお山と吉羽への批判が噴出

し、指導部は大混乱に陥った。

批判の矢面に立たされたのは秋山と吉羽である。秋山と吉羽の悲痛な声を一度にわたって聞いているにもかかわらず、明大闘争に動員した活動家を指揮した最大の責任者である清水丈夫と本多さんはその場におりず、活動家の声を何一つ聞いていない。二人が本当の指導者であれば、中核派の活動家の中に起きている疑問の声を聞くために、自らの身をその場に置く。陶山さんなら万難を排して出席し、活動家の批判に自らの身をさらし、そこから何ものかを学ぶ。——最大の責任者である二人は何も学ばないまま、明大闘争は過ぎ去った。

## 6

ここで一月二日の団交（手打ち式）の場面に戻ろう。

体育会は、千人近くを壇の下に整然と配置し、おそらく数百人を学生の中に散らばせていたはずである。それでは、本多さんと清水丈夫の指導下にあつた秋山と吉羽は、一月二日の団交の場面で中核派の活動家にどのような行動指針を出したのか（ぼくは知らない）。

中核派だけで七人は下らない活動家を動員しているのだから、三人から五人を組にすれば、二十組を明大の学生の中に配置できる。手打ち式を破壊せざるまではいかなくとも、手打ち式を混亂させ流動状態にもつていく可能性は十分あつた。中核派の活動家もまた、運動の渦の中でさまざま経験を得ることができる。このような戦術を秋山と吉羽が打ち出したならば、たとえ、予定した戦術通りに事が運ばなくとも、手打ち式を混乱させた。さすが中核派だと、解放派を心服させることもできたのである。

運動（闘争）の中で党派が主導権を握るとすれば、①運動の見極め、②適格な行動指針、③適格な行動によってなされていく。その能力を育むことができるか否かが、運動の中での党派の力量とさえ言えるだろう。しかし、党派の我欲の主張は、愚劣な亀裂とヒステリックだけを生み、発想力においても実際の組織に関しては、自らの党派をやせ細らせていくだけのことだ。

明大闘争を介して中核派が全学連（都学連）の主導権を握つてしていくことを目的にしたかったなら、ぼくの描いた戦術と清水丈夫が採用した戦術のいずれが有効であったか。問うまでのこともあるまい。中核派の主導のもと、中核派と解放派も含めた全学連（都学連）の運動として明大闘争に流動状況をつくりだし、それを通して、秋山と吉羽も、高橋孝吉も北村行夫もスケールを育んでいくことが可能なはずだったのに。

三全総路線を打ち出した本多さんに、この理が分からぬはずはない。にもかかわらず、清水丈

夫の主張する我欲の路線「アンドを追いつめ、秋山全学連委員長を実現する絶好のチャンス、そのためには全中の中核派活動家を集めて圧力をかける」に舌を巻いてしまったのはなぜか。

## 4 本多延嘉の客観的知性と政治的才覚

本多さんは運動の渦中にいることのできない人だ。同じく、清水丈夫も運動の渦中にいることのできない人だ。本多さんは運動の渦中に入らずに、その外部の革共同政治局の位置で運動を見てきた人だ。清水丈夫は運動の渦中に入らずに、その外部の全学連書記局また革共同同学対部長の位置で運動の采配を振るってきた人だ。このように、本多さんは運動の渦中にいることも運動の采配を振ることもできない人だが、清水丈夫は運動の渦中にいることはできないが運動の采配を振るうことのできる人だ。

清水丈夫は、安保ブンドの島成郎がブンド結成以前から運動の采配を振ることを見できている。また、運動仕掛け人としての森田実（東大）の姿を見できている。松崎さんを除いた革共同（探求派）政治局員には、この二つの資質が欠落している。そのことを痛切に感じ取ったのは誰よりも清水丈夫である。

運動の渦中に入れないだけでなく運動の采配を振ることのできない本多さんの眼には、革共同政治局に欠けている島成郎と森田実の資質を伝承したものと清水丈夫が映ったよう思われる。

## 1

運動の采配家も運動の仕掛け人も、たいへん複雑な能力を必要とする。采配を振るつたからといって采配が功を奏すわけではなく、功を奏す采配を望んでも容易にできるものではないのだから。加えて、采配を振るえず無為に過ごす（六〇年安保の革共同はそれに該当する）、下手な采配を振るうことによつて運動を壊す、いずれの無能が深刻か、はははだ微妙な問い合わせ持ち上がる。采配嫌い（島成郎と森田実嫌い）の本多さんが、政治組織である以上、自分が嫌つた政治資質を組織にとり入れなければならぬと考えたところまでは正解だと思うのだが、悲しむべき、本多さんはその判断を見誤つた。

運動の采配家も運動の仕掛け人も、状況判断（なかなか運動の読み）、組織を読む力、大胆さ、柔軟性、心理の掛け引き、タイミング（間合）、ハッタリを必要とするが、運動の仕掛け人の場合は、なかなか交渉能力が重要な。清水丈夫に采配家や運動仕掛けへの憧れ（采配を振ることへの快感も含めて）があることは間違いないが、だとしたら、島成郎や森田実から何を学んだのか（彼らの負の側面を含めて、大いなる疑問を感じる）。たとえば、采配を振るうことが露骨に出る。そこには心理の掛け引きなど何もない。ハッタリもない。いや、采配を振るいながら（命令しながら）、そのことの不安がこぼれる。虚勢によつて采配を振つてることを隠せない。自分の資質に合わないものに憧れたと思わざるをえない。人間臭いとも、自分に無自覚だとも言える。当時からそう思つていた。

何よりも致命的なことに、状況判断を欠落させる。姫岡玲治（青木昌彦）と組んでつくったプロ通は数ヵ月で自滅するが、何をどう読んでプロ通をつくつたのか、読みが見えてこない。さらによつた、

采配家として屈辱極まりない結果に陥つたにもかかわらず、そこから何を学んだのかまったく伝わつてこない。

これは六六年一二月に再建する全学連に関する話だが、六五年暮に結成された全学連再建準備委員会が、六一年の十七回大会に開かれた各党派の代表から事情を聞く会議を持った。再建全学連を何回大会にすべきかが持ち上がつたからである。中核派（革共）から清水丈夫とぼくが出席したが、清水は「何がどうこじれて分裂したかを分裂大会を強行した責任者として事実説明するのではなく、『旧三派が分裂させたので、十七回大会は有効だ』と語り出すのだ。因縁をつけられた解放派代表の下山保も売り言葉に買ひ言葉へと走る。正常な大会ではなかつた十七回大会が有効か無効かを判断するのは全学連再建の当事者であることを理解できず、決裂を目的にするような話を全学連再建に向けての会議で発言する。ぼくが話を変えて事なきを得たが、目的が見えなくなつてしまふのだ。

ぼく自身は、「十七回大会は無効、したがつて十七回大会にすべき」と考えることができる人間である。このようなばくの考えは、指導者からは利敵行為に思われ、中核派の中にさまざまな波紋や疑惑をもたらす。「小野田は、書記長を僭称してきたということなのかね」に行き着くからだ。指導者は、疑惑の噴出を怖れるがゆえ、分裂の原因をうやむやにし、自らの正当性を主張したがる。ぼくの中には、さまざまな波紋や疑惑が生じること大いに結構、それが起きるからこそ党（中核派）の判断力が鍛えられると考えるアマノジャクで肉体質の思考がある。もつとも、ジャンケンで決めるぐらいのユーモアがあつてよかつた、それに気づかなかつたことが何より残念だ。全学連再建大会の議案書の冒頭に、「清水丈夫と下山保のジャンケンに清水丈夫が勝つたので全学連二十二回大会に決まつた」なんて書かれたらアラボーではないか。結果は、全学連再建準備委員会が××回大会を名のらず【全学連再建大会】とする名案で決着をつけた。若い世代の頭脳の方が柔軟になつてきた証拠である。

それでは、秋山全学連委員長実現の方針に移ろう。

ブンドの内部事情は分からないので、どのようないきさつで齊藤を全学連委員長に相いだのか知らないが、ブンドの諸潮流の中でいちばん影の薄い明大ブンドから選んだことを見れば、齊藤全学連委員長はブンド全体の強い意志によるものではないことは容易に推測できる。つまり、齊藤全学連委員長罷免はブンドにさして痛い話ではない。

また、齊藤および明大ブンドにとって、全学連委員長の座を失うことはたいした損失にならない。齊藤にとってみれば、全学連委員長を罷免されて肩の荷が降りたはずだ。

しかし、明大自治会（学友会）の主導権を失うことは、明大ブンドにとって死活問題である。学費値上げは大学当局にとって死活問題である。大学当局から配分される予算は体育会系にとって死活問題だ。明大自治会もまた、大学当局との平和共存を維持することは死活問題である。再建都学連、再建全学連の書記局が明大の学友会室におかれたように、明大自治会はどの大学よりも大学当局か

ら治外法権を与えられている。その上、明大ブンドは生協も握っている。これらの既得権こそ明大ブンドにとって死活問題である。実際に、明大の一般学生の多くからも裏切りとみなされた妥協を「明大ブンド（明大学友会）が行いながら、明大自治会の執行部の座は安泰だったではないか」。

明大ブンドが大学当局と妥協を図つていることが秋山と吉羽（全学連書記局）に伝わつたとき、明大ブンドが齊藤全学連委員長罷免、つまり全学連委員長を手放すことを念頭に入れていたことなど明らかではないか。

清水丈夫には、そのような状況判断がまるでない。深刻なのは、明大ブンドを最も至近距離で見てきた秋山と吉羽が的確な状況判断をできなかつたところにある。

北村行夫都学連委員長の中核派への皮肉の裏には、裸踊りする中核派への怪訝な眼が働いていたはずだ。「いったい、何なの。このバカさ加減は」。